
佐橋圭三とTバック

光太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

佐橋圭三とTバック

【Nコード】

N9270E

【作者名】

光太郎

【あらすじ】

佐橋圭三、五十六歳。妻の不在中に、ソファの上に投げ出された赤いTバックを発見するが……――

佐橋圭三は、その小さな布きれを前に、完全に動けなくなっ
てしまっていた。

ソファの上に、無造作に放り出されている、それ。
重量にすれば、一グラムもないだろうと思われる。

色は赤。ひどく鮮やかな赤だ。
その布きれを、なんと呼ぶのかは知っていた。どうい
うものなのかという知識もある。

ただし、お目にかかるのは初めてだ。

「T、バック」

抑揚のない声で、呟く。

佐橋圭三、五十六歳と三ヶ月。

この歳にして、未知との遭遇だ。

「落ち着け、落ち着くんだ」

無意識に声に出し、大げさなほどの仕草で首を左右に振る。
状況の整理を試みた。

ローンを払い終えたばかりの一軒家、掃除の行き届いたリビング
ルーム。ソファの上には、問題の物体。

本日は日曜、快晴だ。妻は買い物に出ている。大学生の息子は、
いつものようにまだ寝ているのだろう。

佐橋邸に暮らすのは、圭三と妻と、息子の三人。

単純に考えて、この赤い物体は、そのうちの誰かのものだ。

圭三のものではない。

息子のものであるとも考えにくい。

——ということとは——

「美千恵の、か？」

疑問の形になった。

出会ったところはスレンダー美人であった妻。二十年前に息子を産み落として以降、腹部が引つ込む気配はなく、いまではメタボまっしぐらの、妻。

働いているわけでもなく、出歩く趣味を持っているわけでもない。息子の高校時代のジャージを着て、一日家で韓流ドラマを観ているような妻だ。

その妻の持ち物だとしても、いうのだろうか。

圭三は、恐る恐る手を伸ばした。

赤い布に指先が触れるというところで、他にだれもないことなどわかりきっているのに、周囲を見回してしまふ。

あるはずのない監視カメラの存在まで疑った。

そうして、数十秒の後、手に取った。

目眩がした。

それは、Tバックと表現すればよいのか、Tフロントと表現すればよいのか——ともかくも布地の少なさは異常と思われるほどだった。

女性ものの下着の値段など考えたこともないが、おそらくは値の張るであろう、総レースの赤い下着。

初めて触れる神秘を、まじまじと観察する。

これを、妻が。

想像しようとしてみるが、どうしてもできない。そんな妻の姿など、見たことがないのだ。

そうだ、何かの間違いだろう。何かの景品だとか、通販で間違えて届いてしまったとか——そう結論づけようとする。

本当に？ ——圭三の心のなかで、名探偵圭三が囁いた。

それは本当に、何かの間違いか？

美千恵の持ち物ではないのか？

職場の田中がいつていたじゃないか、妻が不倫していたって。巷では熟年離婚なんてもんが流行っているんだ。もう別れたいという気持ちを込めて、わざと不倫が発覚するように、美千恵がここに置いたんじゃないのか――？

ピンポンと、不意にインターホンが鳴った。

圭三は一気に現実に取り戻され、慌ててＴバックをソファの上に戻す。いたずらを目撃されたような、妙にばつの悪い気分になって、打ち消すように咳払いを一つ。

わざとゆっくり玄関へ向かって、戸を開けた。

「こんにちは、毎度ありがとうございます！ 魚六です！」

はつらつとした好青年が、白い歯を輝かせて立っていた。

ジーンズにシャツ、青いキャップがいやに似合う、ひよろりと背の高い青年だ。顔は、美形の部類。若いころの自分に似ているなど、圭三はそんな感想を抱く。

現れたのが圭三であったことに、青年は驚いたようだった。しかし、すぐに満開の笑顔で会釈した。

「あ、ご主人ですか、はじめまして。奥さんにはいつもお世話になってます」

その言葉に、圭三は落雷を受けたかのように打ち震えた。

彼の中の名探偵が、瞬時にある名推理を組み立てた。

奥さん、という卑猥な響き。

いつもお世話に、という婉曲表現。

脳内を赤いＴバックが占める。

「こちら、ご注文いただいた刺身盛りです。奥さんはいつもツマま
でおいしいっていつてくださるんで、サービスしてありますよ」

いまにも沸騰しそうな圭三の脳裏に、昼下がりに乱れる男女が描
かれた。ああ、そんな、いけないわ。いいじゃないですか、サービ
スしますよ。

「妻がおいしい、だと……？」

怒りのあまり、しぼり出すような重低音になった。青年は笑った。

「自信ありますよ、新鮮でおいしいツマです」

「新鮮だと！ そんなバカな話があるか！」

「新鮮ですよ。毎日のように食べてるんで、おいしさだって保証し
ます」

「ま、ま、ま、毎日だとう？」

「は？」

さすがに、青年が眉根を寄せる。

時を同じくして、軽快に電話が鳴った。なおも怒鳴りつけようと
していた圭三は、吸い込んだ息をむりやり飲み込む。そこで待つて
いろ、といい捨てて、リビングへ戻った。

「……もしもし」

不機嫌に受話器を取る。聞き慣れた妻の声が、飛び込んできた。

「あ、お父さん、あたし。魚六さん、もう来ちゃった？ それまで
には帰るつもりだったんだけど、買い忘れ思い出しちゃって」

「いま来てる」

「あらあら、ごめんなさい。タンスの上にお金あるから、それで払っ
つとして」

ふわふわとした、平和そのものの声に、圭三は悔しいような情けない
ような、なんともいえない気分になった。

気づいていないとも思っているのだろうか。

「いいから、すぐ帰ってこい。話をつけようじゃないか」

「だめよう、ないと困るもの。あなたは必要ないでしょうけど。も
うお店に戻ってるから、ティーバッグだけ買ったらすぐ帰るわ」

「Ｔバックだと！」

「紅茶ないとはじまらないのよ。だいじょうぶ、コーヒーは家にある
から」

ぶつ、と電話が切れてしまった。

圭三はわなないた。

この上、まだ買うというのか。

ないと困るとまでいうのか。

結婚して三十余年、近頃では確かに、愛だのなんだのはどこかに
いつてしまつて、惰性のような夫婦関係であつたかもしれない。

けれど、夫婦とはそういうものだ。

家族なのだから、それでいいではないか。

先ほどまでの勢いは、受話器の向こう側に吸収されてしまったか
のようだった。力なく歩いて、タンスの上の封筒を手に取ると、待
たせてあつた青年に代金を払う。

「俺は、認めないぞ」

口にしてしまつたら、余計に惨めな気分になった。

妻と結婚して、息子が生まれて。家庭を顧みずにあくせく働いて。定年までもう少しというところで、この仕打ち。

泣きたくなってきた。

それでも——圭三の心に、愛する妻の笑顔が咲く。それでもやはり、あいつには幸せでいて欲しい。

本気で、本当に本気で、選んだ男だというのなら。

この男も、真剣だというのなら。

「これからも、妻を、頼む」

信じられない言葉が、口から滑り出た。

青年は笑った。

「任せてくださいよ！ ご主人もお好きですねえ」

「やっぱり許さん！ 帰れ——！」

圭三のセンチメンタルは、実に刹那の出来事に終わった。

蹴飛ばす勢いで青年を追いつくと、再び怒りに支配され始める。

認めない、認めないぞ——拳を握りしめて、リビングのソファへ戻る。こうなったら全面戦争だ。家族会議だ。離婚協議だ。

証拠としてTバックを没収しておかなければと思った。隠されて、いい逃れされたのではたまらない。

「父さん、なに怒ってるんだよ」

ソファには、寝癖満載の息子がいた。

あくびをして、圭三を見上げてくる。

「二階まで声響いたよ。起きちゃったじゃん。——あ、それ、魚六の刺身？ やった、今日ってなんかのお祝いだっけ？」

圭三の耳に、息子の言葉は届いていなかった。

彼の目は、無造作に投げ出された息子の右手の、その中にあるものに、釘付けになっていた。

赤い、Ｔバッグ。

なぜか、息子が握りしめている。

「お、おまえ、それ……」

「ああ、これ？ バイト先のビンゴ大会で当たっちゃってさ」

「お、おまえの？」

圭三の全身から、力が抜けた。

なんと愚かな勘違いをしたのだろう——思わず、苦笑する。

そうだ。

現実には、そんなものだ。

どこにでもある平和な家庭。笑い話にしかない、幸せな勘違い。

奈落に落つこちた後の浮上は、喜びを伴うところかあまりにばかりしくて、圭三は笑った。

そのうちに、戸の開く音。ただいまあ、と声がして、美千恵が帰ってきた。

「ごめんごめん、お金、わかった？」

「ああ、ちゃんと払っておいた」

「そう、ありがとう。じゃあ、お昼ご飯の準備をするわね」

「オレ、その前に朝飯」

「なにいつてるの！ もうお昼よ」

三人の笑い声が重なる。

圭三の目頭が熱くなった。

なんて幸せなのだろう。そうだ、自分はこんなにも幸せではないか。

「おいおい、買った物を放り出して。カバンも戻して置かないと、また探すぞ」

そそっかしい妻に、関白風を吹かせる。我が物顔で、近所のスーパーのロゴの入った紙袋とカバンを持ち上げると、片づけておいてやろうとそんなことまで考える。

実に清々しい気分で歩き出そうとして、ふと、見えてしまった紙袋の中身に、目を奪われた。

圭三は、息を飲んだ。

それは小さな布きれだった。

重量にすれば、一グラムもないだろうと思われる。

色はパッションピンク。目が覚めるほどに鮮やかな、パッションピンクだ。

おそらくは値が張るであろう、総レースの……――

了

（後書き）

読んでいただき、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9270e/>

佐橋圭三とTバック

2010年10月26日06時23分発行